

スカウトに夢を与えよう
～ セレッソ大阪岡野社長の講演に思う ～

団委員長 浜嶋敏一郎

7月5日の第8回SCIXスポーツ・インテリジェンス講座で、ワールドサッカーに7人の選手を送り込んだセレッソ大阪岡野雅夫社長の話を拝聴して、スカウトの育成方法について考えた。

セレッソ大阪は、「セレ女」現象を巻き起こし、多くのファンを獲得している。これは若い選手のファンサービスが功を奏したと説明があった。1時間の練習に集まってくるファンのために1時間半のサインをしたり、写真を取らせてあげる。選手が自発的に行っており、これがファンを集めている。ボーイスカウトならかっこういいスカウトが、女性や男性の友達の見学者を集めるようなことに該当する。

世界的な知名度については、イングランドに比べて日本が際立って劣っていることが、メディアの放映権である。イングランドはメディアからの収入が50%であるのに対して日本はほとんどなしの状態である。NHKでの放映も視聴率が2.5%で、関心が極めて少ない。面白い試合をしてメディアに取り入れてもらうようにしたいと話している。最近本が書かれるようにもなったそうだ。ボーイスカウトは、テレビに出るのは日本ジャンボリーの皇太子の見学ぐらいだ。また、これだけ伝統的な活動であっても、ボーイスカウトに関する本が無いことが不思議だ。活動を良く知っている人が書かないといけない。幼児向けの絵本や年少者のための本がたくさんあれば、ボーイスカウトに入隊する人は増えるはずである。私は、カブ隊の最後の隊長の年に隊集会の日記を残している。これを素材にして本を書きたいと思ってすでに4年経った。65歳の退職後は、本を書きたいと考えている。

選手の育成は、小学生から高校生までスクールで行われている。選手には、毎回喜びを感じるようにすることを方針にしている。私たちがスカウトに対して行っている。変化や成長を感じることができる喜びだ。スカウトの成長をリーダーも喜ぶことができる。この方法は、能力測定で10m走や30m走で順位をつけるような説明があった。ボーイスカウトの進歩制度は正しく、毎回このことを実行している。ただ、もっと喜びを感じる意識を持たせる仕掛けが必要かもしれない。誰もがカブブックのサインをもらいたい、カブブックを欲しいのでボーイスカウトに入りたいと思うようにPRしたいものだ。他の団ではボーイ隊の初級章から保護者とともに激励会を行っているところがある。進級の喜びを意識させるにはよい方法だと思う。2団は1級章から団面接だというのは考え方としては間違いない。でも、それは過去のことであり、これからは喜びを早くから、いつもスカウトに与えるということを優先させるという経営的な発想の転換が重要だ。

選手の育成には、世界に通用する選手を育てる目標がある。世界と戦うためには小学校から外国へ派遣して、体験させることを実施している。派遣費用は、個人負担が5万円までとしている、他のクラブは20万円と高い。このことを確認したら、高ければチャンスが無くなる場合もあるから、最低5万円を頂く。本当は無料にしたいとのことである。日本ジャンボリーや世界ジャンボリーにスカウトを参加させるには、同様な考えに立つと支援費用の金額は、2団全体で確保していくことが重要だ。

選手は、スクールにおいても天然芝の上で練習をしている。良い環境が重要なのだ。私は、2団専用のキャンプ場が欲しいなと思う。良い環境にスカウトが集まってくるはずである。

そして、成長するにはトライアンドエラーを重視している。失敗してもいいからチャレンジすることが必須という。ワールドカップでは、パス回しが多く、仕掛けが少なかったようだ。おもしろくない試合の理由なのだろうか。ボーイスカウトでは、おもしろいプログラムは、時間がかかる。でもおもしろくなかったら興味が薄らいでしまう。隊集会のプログラムは、計画書ができてから考えることが大切だ。スカウトがわくわくする気持ちで隊集会の参加するかどうか、今から始まるプログラムに興味をもてるかどうか、スカウトが期待する気持ちを持たせる仕掛けを考えて実行することで、プログラムの評価が決まるのだ。

セレッソ大阪は、2014年にウルグアイ代表の大物FWディエゴ・フォルラン選手を獲得した。普通の選手は10時開始の練習に9時半に集合するが、彼は8時半に来て準備を行い、100%の体調にしてからグラウンドに出る。首脳陣はこれを真似てほしいと思っているができていない。一流の選手は、体調管理がすごい。イチローの入念な準備や世界の王の素振りが有名だ。一流の社会人や一流のボーイスカウトとしてどうあるべきか。5分前集合はよいことだ。でもリーダーは15分前に集合、隊長はさらに15分前に集合がきちんとできる隊はすばらしい。面白いプログラムが実行できる。スカウトが夢を持てる隊になれるはずである。

もうひとつ、ある監督がチームの食事全員揃って「いただきます」と「ごちそうします」をすることにしたそうだ。これで一体感を持たせるという目的という。私たちは、これをずっとしている。でも、一体感を持たせるということをもう一度噛みしめて、きちんと続けていきましょう。